



ERICSSON ER207

30g増量で実現した 金属の豊かな質感

ER207はエリクソンが日本市場に初めて本格的に投入した携帯電話だ。「欧米でのモデルをそのまま使うのではなく、新たにデザインしなおした」という外観からもその力の入れようがうかがえる。

デザインを最優先する ひと握りの大人のために

「日本の多くのユーザーが携帯電話に求めているのは豊富な機能と品質だと思う」。ER207を手掛けたシニアプロジェクトマネージャーのSarokhanian氏は分析する。実際にはデザインを最優先にする人は多数いると思うし、似かよった外観の製品しかないからそれを買う

しかないのが現状なのだが、結果的には氏の言うとおりなのかもしれない。そんな中、エリクソンは“ごく一部のデザインを重視する日本人”に向けてER207を開発した。デザインはERICSSON USA。アジア、ヨーロッパ、北米のデザインセンターにそれぞれデザイン案を募り、日本でのユーザーテストの結果、アメリカで描かれたデザインを採用した。

きょう体後部にはマグネシウム合金、フリップ部にはステンレス…約30gの増量と引き換えに使われた多くの金属パーツがER207の最大の特徴だ。そこまでしてこだわったのは高品質の表現。スピー

カーの音質の良さや日本でデザインされたという液晶部のアナログウォッチのアイコンも全体のイメージを引き立てている。「BMWやGUCCIのような“所有する喜び”を感じさせる欧米デザインを好む人を対象に、ニッチ市場を目指していく」戦略だ。その意味でデザインはマネジメント通りに仕上がったといえる。片手でキーを押すのが相当つらい作りなど、日本では一般的に受け入れがたい部分も、ER207のユーザー層はそれほど気にしないだろう。世界分業で開発が進められたこの製品は、日本の携帯電話には見られない“大人っぽさ”がとても魅力的だ。

本体との調和するチャージャーや透明のキーなど、あくまで大人っぽいデザイン。アナログ時計のアイコンも効いている。



ER207の原型T28s。ワンタッチでフリップが開く機構はER207にもほしい。

PROFILE ●酒井俊彦(さかいとしひこ)
サカイデザインアソシエイツ代表。87年東京造形大学卒業。通産省選定グッドデザイン賞、アビターレイテンボ展(伊)、1995デザインの現在展(加)ほか。